

事後評価報告書(日本-スイス研究交流)

1. 研究課題名:「末梢リンパ組織において、リンパ球の遊走・活性化を制御する分子基盤の解明」

2. 研究代表者名:

日本側: 九州大学 生体防御医学研究所 教授 福井 宣規

相手側: University of Bern Professor Jens Stein

3. 総合評価: (A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

本研究課題は、機能・シグナル研究に優れた日本側グループと、最新のイメージング技術を有するスイス側グループとが共同して、免疫応答における DOCK ファミリー分子の機能を解明しようというものであり、日本・スイス両グループの共著による原著論文 2 報、国際学会発表 5 件が成果として出ている。特に、ヒト複合型免疫不全症の原因遺伝子である DOCK8 の作用を Cdc42 アクティベーターの観点から明らかにしたこと、また DOCK2 欠損により T 細胞活性化が顕著に低下することを見出し、その機構の解析から獲得免疫応答の新たな制御機構を見出したことなどは、特筆に値する共同研究の成果である。日本側でも、DOCK5 作用機序として RacGEF 活性とは無関係な新しい動作原理を明らかにしたこと、DOCK2 欠損により慢性拒絶の原因とされる血管炎が著しく軽減されることなど多くの成果があり、DOCK8 や DOCK2 に関する成果をはじめ、臨床や創薬面への波及効果が期待できるものも少なくないと思う。これらの研究の過程で新たに作製されたコンディショナルノックアウトマウスなどは、今後の研究への大きな寄与が期待できる。

(2)交流活動の評価について

交流は比較的短期間にとどまっているものの、技術指導や未発表データを含めた詳細な議論を行うなど、実質的な研究交流は密に行われているといえる。しかしながら、多くの日本人研究者が関わっているにもかかわらず、実際に往来したメンバーに限られていた点はやや残念に思われる。より多数の参加者に交流の機会があった方が良かったのではないだろうか。また、長期派遣は人材育成の観点でより有益であると考えられるため、今後、大学院生などの留学を通して、更なる交流を図る計画が進められることに期待したい。